43. 全身カメラによる骨スキャニング

中野　俊一　　長谷川義尚
塩村　和夫　　井深啓次郎
（大阪府立成人病センター）

全身スキャニングには従来シンチスキャナーが用いられてきたが，最近ガンマカメラを用いた全身スキャニング法が開発された．われわれも1年来，約50例の症例で，主として^{99m}Tc-EHDPによる悪性腫瘍の骨転移の検査に全身カメラを用いたので，従来の方法で作成された像（静止像）と比較して全身カメラ像（移動像）の性能について報告する．用いたのは東芝製202型ガンマカメラおよび付属の全身スキャン装置で，まず^{57}Coの点線源により，静止像と移動像の均一性，直線性および分解能を比較した結果，直線性は移動像の方が良好であるが，分解能は静止像の方がややすぐれている．臨床例は日本メジフィジックス社製の^{99m}Tc-EH-DP 10～15mCiを静注し，4～6時間後に背臥位および腹臥位で全身スキャンを行い，次で各部の静止像を作成し，両者を比較した．移動像でも個々の肋骨および椎体を識別することができる．乳癌および肝癌の術後再発例の骨転移像について両者の像を比較したが，肋骨や指骨などの小さな転移巣における異常集積像も，静止像と同様に移動像でも検出することができる．ただし四肢の骨を十分描出するような条件では脊柱像が濃くなりすぎてその詳細が判らなくなる場合があるが，このような時にはそれぞれに適する条件で2回スキャンする必要がある．以上全身カメラは^{99m}Tc-EH-DPで骨スキャニングを行う場合，静止像に劣らない検出力を有し，検査時間を短縮することができる．

44. 原発性骨腫瘍の骨シンチグラム像とX線像（第2報）

○福田　照男　　荒井　六郎
越智　宏暢　　玉木　正男
（阪市大・放）
石田　俊武
（同・整外）

第7回本研究会での報告にひきつづき，組織診断の明らかな悪性骨腫瘍15例，良性骨腫瘍23例の累計38例について骨シンチの診断面，治療面への応用について更に検討を加えた．診断面については，患側，健側の一定area内のカウント数の比をとることにより良性，悪性の鑑別を試みた．陽性像を呈した良性腫瘍のうちosteoid osteomaを除く巨細胞腫，fibrous dysplasia, eosinophilic granulomaの全例においてはその比が4以下であり，一方悪性腫瘍のうち骨肉腫ではすべての例で7以上であった．これらのことからシンチグラムでその比をとることにより，良性，悪性の鑑別に有用であると考えられる．

治療面での応用については，骨肉腫例で放射線治療を行った例で，治療前，治療中，治療後にシンチグラムをとり健側との比を比較した．その値は明らかに減じていた．治療中，治療後の局所の組織とは比較は行っていないが局所の治療効果を判断する上で有用な一方法と考えた．また外科的及び放射線治療での病巣範囲決定に役立った．以上診断面，治療面で原発性骨腫瘍に対する骨シンチグラフィーは有用であると考えられる．

45. 核医学検査が有用であった肺門型肺癌

桂　武生　　楢林　勇　　熊野　町子
松本　晃　　松尾　導昌　　高田　佳木
絵野　幸二　　中西　義明　　河野　通雄
（神大・放）
西山　章次
（同・中　放）

第1例は32歳男性で，1年来くり返し，咳嗽，

Presented by Medical*Online